

リアリズム文学と教育 (一)

児 嶋 文 寿

以下、この小論の概要を示す。

序(一) 文学と教育について

(一) ロシア文学と教育

I トルストイの文学と教育

——その批判的リアリズムと教育思想——

(一) 初期トルストイ文学と方法

(1) 初期文学の概観

(2) 批判的リアリズム——文学のテーマと方法

(3) 「余計者」の克服と限界 (以上本号)

(二) 初期トルストイの教育思想

II ゴーリキーの文学と人間形成論

——社会主義リアリズムの確立と人間形成——

III マカレンコ教育学と文学

——集団主義教育学の確立——

序 (一) 文学と教育について

斎藤喜博氏は、その著『私の教師論』⁽¹⁾の中で、「教育が芸術とにていることは、そのどちらもが『創造』と、『質の高さ』を要求している」、さらに、「教師のやる教育研究は、実践によって自分を追求していくという以外にない。(中略)……すなわち、文学の創造の場合と同じに、実際の授業展開での衝突追求によって、教師としての自己を追求し、教師としての自己変革、自己形成をはかって行くことが教師としての教育研究である。」と、教師の教育研究の姿勢について述べている。この書に限らず、斎藤氏の著書のなかには、文学についてふれられたところが多くある。そこに、氏の優れた教育実践を生み出した一つのモメントとして、文学者である斎藤喜博をみることは、早計すぎるであろうか。

狭義の意味での文学の教育性については、文学教育という分野での追求がある。だが、例として、上記の斎藤喜博氏の場合は、その分野の範囲内でおおえないものを含んでいる。すなわち、広義の教育性、教育学に対する教育性、文学の教育学的価値といえるものを示していないであろうか。

この序(一)の部分では、以上の問題意識を端的にあらわしているマカレンコ教育学の分析を、文学とくに、ソビエト＝ロシアのリアリズムの系譜の中で、試みようとする前提として、文学が持つ、教育学に対する教

育性を、まず、日本の教育学の文学への対応をたどりながら、その主要な点を、あきらかにしてみたい。

(1) 学校の役割を見る視点として

「姫君の御前にて、この世馴れたる物語など、な読み聞かせ給ひそ、みそか心つきたるものの女などは、をかしとにはあらねど、かかること世にありけりと、見馴れ給はむぞゆゆしきや。」⁽²⁾石井氏は、「明治以前の文学教育」のなかで、この論理が現代の教育者が、文学の弊害をつく論と変わりがないようであると述べている。この論文は、明治以前の教育と文学の疎い関係について述べたものであるが、小川氏は、日本の近代の学校と文学の関係について、「わが国の学校は、文学にとってきわめて狭い門であり、学校教育と文学教育とは、相容れないものであった」と書いている。すなわち、「近代文学は、リアリズムによって人間と社会の現実を反映し、またそのリアリズムによって、人間性を抑圧し歪曲する現実を批判する。生徒がそれにふれることによって、真実に生きようとする近代的精神」とわが国の学校とは、全く、相容れない目標をもっていた。というのである。こうして、氏は、「学校教育は文学教育と一致する目標をはたしてもっているかどうか、それはどのようなものでなければならないか」⁽³⁾が基本的な問題として考えられなければならないと述べている。

文学が、子どもの人間形成のうえで果す役割については、後にみるが、このように学校教育と文学との関係を検討することによって、学校教育が、その時代のあるべき人間形成と、どのような関係にあったのかがあきらかとなり、また、そのような人間形成に対して学校教育が、どのような役割を果していたのかという教育の相対的な把握をも可能とする。もともと、その際、その時代の文学そのものの性格と、学校教育の中で行われていた「文学教育」の内容の検討は必要とされる。

このような立場からの学校教育の検討は、教育学の立場からより、文学の立場からのものが多い。

(2) 文学教育が教える教育

つぎに、文学教育といわれるものが、子どもの教育に対して、何を提起しているかをみてみよう。

① 蔵原氏は、文学と教育の関係でもっとも重要なものは、それが「大衆の人間形成のうちに果す役割」

であるとし、「新しい文学（社会主義リアリズム文学——筆者注）は、現代の積極的な人間典型を造形し、その典型が大衆の模範となりうることによって、またその否定的人間典型は、現在のわれわれのうちにある古いものの否定的なものを示し、それを鞭うつことによって、人間の改造、人類の解放に参加し、新しい人間、新しい社会の形成に役立つのである。ここに文学のもつ重要な教育性がある」と述べている。現代の積極的な人間典型に、学ぶことは、重要な課題と考えられる。

② また、蔵原氏は、新しい文学、および古典からのすぐれた芸術文学のもつ教育法が現実の正しい認識のうちであり、「現実認識としての芸術文学作品の教育性がある」と述べているが、この現実認識の教育性に注目し、それを一層発展させ、体系的な文学教育論を主張しているのが、西郷氏の「関係認識・変革」の教育論である。そこでは、「教育の指導性」の問題が提起されている。彼は、戦後の日本の教育に大きな力をもったプラグマティズムの認識論は、認識と認識主体との一致を「科学性」の基準としている。だが、弁証法的唯物論では、認識と認識主体との一致は、単にその認識の社会性（＝階級性）を示すにすぎず、科学性とはあくまで、認識と認識対象との一致を指しているとし、そのちがいを述べ、「ただひとつ、労働者の立場に立つての認識と認識対象の一致のみが、……科学的ということである」とし、「認識主体と認識が一致しているということだけにとどまるならばそれは教育における指導性の放棄である」と述べ、教育的課題は関係認識（例えば生産に対する関係認識）を、なんらかの方法で、生産者としての認識の高さにまで変革し高めねばならない、としている。この関係認識・変革の教育論は、文学のもつ現実のリアルな把握に依拠し子どもの現実認識を豊かなものとするとともに、それを生産者としての認識にまで変革することを主張しているが、現実認識の教育性、正しい現実の子どもによる把握の重要性とその教育の問題を提起している。

③ 現実の把握について、科学的認識と芸術的認識のそれぞれが果す役割については、ここで触れるまでもないかもしれないが、蔵原氏は「現実の全体的体系的な認識は、科学にまたねばならないが、芸術は科学の抽象化、論理化の過程において取り残されがちな個別的具体的なものを取り上げ、それを典型的な姿のうちで造形し示すことによって、科学の欠をおさない科学とともに、現実の正しい全面的な認識をあたえる。とくに現実認識の重要な部分である人間の細かい性格や心理の具象的な認識は、どうしても芸術の助けをかりなければ十分なものとはなりえない」と、芸術的認識の重要性を説いている。

これに関連して、山住氏は、子どもの側の認識、思考の問題に注目する。この問題は、いわゆる「芸術教育」、「美育」の問題である。「もちろん論理的認識とか科学的思考を発達させていくことは大事である。しかし、これを発達させていく過程で、子どもの可能性をできるかぎり開花させていこうとする立場からいって、脱落した面がでてくるのではないか。論理的認識や科学的思考とは異質の非合理的、感性的なものでも、人間の生活のなかでは、それ自体として価値があるのではないか。……人間の生活のなかでは、論理的認識だけではなく、芸術的感動や意志的行為も重要な意味をもっている。」こう前置し、例えば、教科研が1956年の活動方針で「教育の過程は、論理的な認識を子どもたちの間につくり出してゆく過程である」としたことへの一層の深い検討をうながしている。

芸術的感動といわれているこの面の教育は、「美育」といわれるものであるが、例えば、ソビエトでは、この美育は、子どもの共産主義教育の重要な構成部分である。カイロフの教育学教科書では、「美的手段による人間の形成は美学の思想性その共産主義的方向性と不可分に結びついている。美育のソビエト的体系のこの原則的な立場が、芸術の手段によって生徒たちの発達にたいし、それらのイデオロギー、感情、性格、才能、興味、趣味の形成にたいする多面的な影響の土台をつくっている」と位置づけている。文学教育は、ソビエトにおいては、この美育の主要な教科となっているのは、衆知の通りである。このようにみると、この教育は、単に、それが、子どもの才能を全面的に開花させるという点での意味を持つだけではなく同時に、子どもの知的生活、イデオロギー、感情、意志の土台でもある。この教育は、その意味でもっと重視されなければならない。

④ また、さらに、「国語教育は、日常生活におけることばを基底とし、文芸を頂点とする三角形に図形化して考えることができよう。……われわれの領域問題は、基底及び基底の上のひろがりを見出すことであり、又、かくの如き基底と基底のひろがりの上に立つ頂点として、新たに文芸を見直すことでなくてはならぬ」という国語教育の立場からの主張は、文学、ことば、そして思考を貫徹する国民的特質の問題を提起しているといっている。国語とそれに貫徹する国民性の究明も重要な課題である。

（3）文学が教師に教えるもの

さて、(2)とも関連するが、つぎに、文学の教育性が教師に提起するものを検討しよう。

① 国分、小田切編「文学のなかの教師」のまえがきで、編者は、「これによって、今日以降の教師の生き方についてある示唆を受け、また、人間教師のあり

方についてまっすぐな要求をもつことができるなら⁽⁹⁾と、この本の目的について述べている。教師自身の人間形成に対し、文学の教師の典型的法則性は、学ばねばならない。

② 又、前述の美育の問題に関連し、教師の美的感覚の問題がある。山住氏は、「芸術教育は、教科としておかれている音楽科や図画工作科、あるいは美術科だけでおこなわれているのではない。学校生活全体の美的構成が問われなければならない」とし、学校生活の美の問題として、集団、子どもの服装、板書、ノートなど、「全体としての美しさが、子どもの心情や学習能力に、どのような影響をあたえるかという問題がある⁽⁶⁾」と提起している（このことは、むしろ文学と教育という問題を超えているかもしれない）。子どもの発達の土台が、一方では美育といわれる面にあるとすれば、それは総合的に、学校生活の実践において、自主的、計画的に行われることは、重要である。この点の重要さは、齋藤喜博、マカレンコの実践において顕著である、とすれば、教師自体の美的調和も重要となる。子どもの感動という側面と緊密に結びついていることから、子どもの形成を真剣に考え、実際に行う教師にとっては、文学、芸術を通して自己変革をもせまられる課題でもある。

前述、ソビエトの教科書は、この点について、つぎのように述べている。「どのような認識課題のさいにも、それが、もっている美の側面を教師はみのがしてはならない」「学校集団の環境と生活と行動と文化とのなかに、また学習作業のなかに美をとり入れること」「先進的な学校の作業の経験は、美育のよく考えられた体系が、生徒たちの規律の強化に、学業成績に、学校の社会に役立つ作業の質に集団の結合におよぼす影響のすばらしい例証をしめしている。⁽⁷⁾」

③ 第三のものとしては、現実認識の問題である。文学がもつ芸術的認識を高める意義については、ふたたびふれませんが、ここでは、教師にとっての主要な現実把握の対象である子どもの把握の面に眼を向けてみよう。この点については、坂元氏の鋭い指摘がある。氏は、マカレンコが「わたしは、自分の最初の教え子達の方に向かって、彼らをゴリキーの目によって観察しようとしてつとめた……わたしはすぐに成功しなかった……わたしは、人間の行為のなかに、基本的な軸とバネを見ることをまだ学んでいなかった」と述べている⁽¹⁰⁾。このゴリキーの目は、「ゴリキー文学の中に展開されている人間の可能性を発見する眼=能力」「『たんなる自然のひき写しである自然主義的人間』から『すばらしい典型的人間』を区別する眼、つまり、人間の中にこのような『典型的人間』を発見して、そのあらゆる萌芽をのば

していく能力」である。「単なる自然のひき写しである自然主義的人間」の把握は、近代の自然主義リアリズムの創作方法であり、又、それは、作家の世界観を根本的に規定する「実生活にひろく存在する。また萌芽、可能性として存在する。一定の社会関係の中のある一定の人々の一定の生活態度、心情、気分などの相異をなによりも前提としている」⁽¹¹⁾そこでは、作者の生活態度は「忍耐主義、無抵抗主義」なのである。すなわちこのような生活認識、生活態度の中からは人間の可能性を発見する目は開かれぬ。それは、なによりも、「現実の社会的関係を科学的に分析し、それによってその中にいる人間の行動性、バネを発見し、それを鼓舞しようとする作者の人生態度」「生活への人間の意志を強め人間のなかに、現実をたいする、そのあらゆる圧迫にたいする反乱を呼びさまそうとする」作家の態度、そして又、ゴリキーにあっては、作家自身、「ゴリキー自身が、その創作を通じて、そのような自己教育を自覚しようとする感動的な人民の一人——まさに『典型的人間』の一人であろうとした」というところから生まれている。

以上が坂元氏の考察であるが、ここでは、作家の人間把握の問題から、教育における子供の理解、子供の変革や形成での子供の把握の問題——教師における主要な現実把握——が、文学とくに社会主義リアリズムの方法から、教師自体の自己変革の問題として結びつけられ提起されている。

④ 国分氏は、「教育、とくに今日求められている真の教育は、そのねらいとするところに、関してであれ、その適切と思われるやりかたについてであれ、こんどは、著しく真の文学の側に接近しつつあることができる」「ここに人間の魂をつくりあげるための方法、態度、心がまえという点では、文学の創造方法、創作態度がねがいとしているものとは、まったく同じ方向にむかっているということができる。……その教育方法は、まじめに文学者たちが、かれらの生みだす文学（特にリアリズム文学）のなかで造型しようとしている新しい人間像、そのつくりあげかたと、なかなかもって、似かよったものを求めているように思われる⁽¹²⁾」と述べている。前記の坂元氏の論文は、この内容の一つを教師の問題として、深く掘り下げたものであったが、ここでは、文学、とくに社会主義リアリズムの方法、まさに、その「典型造出」の方法を通して、教育の方法に、接近し、貴重な教訓を生み出すものとされている。「典型的人間」は「空想的、理念的に創造された人間ではなくて、現実の社会的諸関係の中に生れつつあるものである⁽¹¹⁾」とすれば、この「新しい人間像、そのつくりあげ方」すなわち、現在の社会諸関係のながで、つくりあげられるべき人間像と、

そしてその形成の条件と内容を、文学は、その具体的形象、典型的人間のなかに、現実の条件の中に描かねばならない。このことも教育学にとって大きな課題を提起するものである。この点について、なお、理論的に、日本の現実、民族、地域と結びつけて、日本の文学史に沿って、あきらかにする課題がある。

(4) 文学と教育の結合

このように考察してきた文学と教育の結びつきの条件について、考えてみよう。

国分氏は、このことについて、「これは、現代の教育観が、知識の切り売り程度のことを真の教育とは考えなくなったということにもよるが、より大きな原因は、学校教育の本来の機能としておしつけられる支配権力側の要請に対して、正しい人間性の発展をめざす教師たちが『事務的』には従がいかなくなったという点である。……よい教育をしようとする教師たちは、教育というしごとの国民性、人民性という冠りを、かれらの行う教育の上にかぶせることを考えはじめていたのである」⁽¹²⁾と、このことは、1951～2年ごろに国民教育運動が再発し、例えば芸術教育にも関心がたかまったとき、まず、子どもをとりまいての俗悪な芸術にたいする抵抗からはじめられ、非教育的な「芸術」から子どもを防衛するというかまきが強かったという事情を考えあわせる時、教師の側の教育観が、受動的なものから能動的なもの、すなわち、いわゆる「国民形成の教育」として、教育が、子どもの人間形成をはかるものとして明確に意識され、追究しはじめられたとき、文学と教育の問題は、真剣で、切実な問題となるということを示している。

また、一方、文学の側においても、その人間形成、典型造出の方法は、後に明らかにするように、まさにレーニンによるロシアにおけるマルクス主義の確立という背景のもとで、科学的な社会認識を通して、ゴリキーの「革命的ロマンチズム」は、社会科学的なリアリズム、現実の社会的、階級的関係の理解と結びつけて社会主義リアリズムの確立を可能とし、正しく現実を反映し、読者にその正しい現実認識に基いて、理想的人間、典型的人間を感動的に示しえた。そして、それが、マカレンコが、その教育学を確立しえた。最大の礎石の一つとなったのである。

こうした文学と教育の結合を可能としてきた条件はまた、文学と教育の結合の正しい条件でもある。積極的な人間形成の姿勢、子どもの変革、国民としての主体の形成が、切実で、主要な課題として、明確に意識された教育の実践と、社会科学的な、社会に対する正しい見通しをもった文学の結合が現在の文学と教育の結合の基本的な条件である。このどちらが欠けても、両者の結びつきは、正しくその力を発揮できない。

こうして、当然、教育と文学との結合は、一方ではそれぞれの運動、活動の独自の発展段階による制約を受けると同時に、その両者の関係においても、接近すればするほど、互いに制約しあう面をも一定の程度において持つてくる。但し、文学が、既存の学校や教育や人間形成上での悪しき慣習による制約を受けにくいところに、その独自の意義を持つものとなれば、教育は、文学からより多くを学ばねばならない。

(二) ロシア文学と教育

——課題意識にかえて——

ソビエト＝ロシアの教育思想の歴史をみる時、それが文学の発達と切り離せない関係にあったことは、いまさら述べるまでもないことであろう。ペリンスキーにはじまる革命的民主主義の立場に立つ文学者達は、いずれも、常に、19世紀の社会思想をリードする文学評論家、文学者であったばかりでなく、同時に、偉大な教育の思想家達であった。帝政ロシアの暗黒の時代において、社会思想の主要な活動の場が、文学にあったという特殊な事情はあったにせよ、この文学と教育の関係は、単に切り離して考えることができない、とらえることができないという関係にあるだけではなく学ぶべき多くのものをもっている。(一)の出発点も、そのような姿勢から生れたものである。

この両者の関係の結実を、私は、マカレンコ⁽¹³⁾にみるわけであるが、マカレンコを考える時、その師＝ゴリキーを通して、豊かなロシア文学の伝統を感じざるをえない。以上の問題意識に立って、ここでは、序(一)でもふれたように、マカレンコの教育学の確立に焦点をあわせて、トルストイ、ゴリキー、マカレンコの三人のリアリズム作家の継承関係の流れの中で、文学と教育の内的関連を明らかにしたいと考える。

マカレンコの思想の確立に最大の影響を与えたゴリキーは、革命前のロシアの学校、教育に対して、真の人間の形成という観点から、容赦のない批判を、たたきつけている。彼は、当時の学校やそこで行なわれている教育を、子どもたちにとって、「地獄の責め絵の三文絵」⁽¹⁴⁾に似たものといい、人間は、「生活そのものから学ばなくちゃならない」⁽¹⁵⁾ことを、初期の自伝的作品のなかで、繰返し主張している。

坂元忠芳氏は、「『教育詩』の世界(上)——地域における闘争と教育実践の諸問題を中心に(マカレンコ研究覚え書)——」⁽¹⁶⁾と題する論文のなかで、「教育詩」に描かれた教育実践を、「一口にいえば、コロニヤにおける集団の形成は、以上のような地域の状況のなかでの、内に浮浪者の克服、外に富農退治と富農の心理、習慣の克服の結合過程」⁽¹⁷⁾であったのであり、

「コロニーとその周辺にひろがるウクライナ農村の豊かな民族的伝統と習俗をふくみながら、同時にはげしい階級闘争と新しい社会の組織がおこなわれているそして、そのなかで偏見や古い習慣にたいする闘争と新しいプロレタリアートの思想、文化の創造がおこなわれている。まさに生き生きとした実生活そのもの⁽¹⁸⁾」であるとのべている。

このようなマカレンコの教育実践に示された人間形成についての広さと深さの認識は、先に述べたゴーリキーの学校や教育の人間形成上で果す相対的な役割、(革命前にあっては、むしろ否定的な役割)を身をもって認識し、自身人間形成をの「人々の中で」常に追究しつづけたゴーリキーの生活・創作態度とそれが生み出した文学の成果の真剣な継承にこそあった。⁽¹⁹⁾

だが、このゴーリキーの功績をみるとき、つぎのような彼のトルストイ評価に注視せざるをえない。「これらすべての背後に、なお、ロシア生活のあらゆる階層にわたって幅ひろく描き出された、はつらつとした鮮明な絵画が存在する。ふかぶかと把握された。だがおどろくほど単純に、ただしく物語られた人間生活と魂の体験が存在するのである。そして、この仕事は、まったく議論の余地のない価値をもっている。⁽²⁰⁾」「トルストイは、ふかく民族的な作家であった。かれは、おどろくほど完全に、複雑なロシア民族の心理のいっさいの特殊性を自分のこころのなかにそなえていた⁽²¹⁾」この文章を読むとき、ゴーリキーの生活、創作態度のなかに、トルストイからの継承の強さを意識せざるをえない。ゴーリキーが様々な作品の中で追究した人間形成は、①民謡・伝承による英雄的典型に学び、②環境・権力との闘いのなかで、③知識・とりわけ社会科学的知識を学びながら、④労働や実生活との結びつきのなかで、⑤人々の集団、とくに、先進的な人民の組織のなかで、果されていくという風に、総括的にみることができるが、このような功績を果したゴーリキーの文学活動と、上にのべたその内容のいくつかは、その先駆を、「ふかく民族的な作家」であった。トルストイのなかに見出すことができる。レーニンの「ロシアにおける資本主義の発展」が社会科学的に、ロシアの資本主義の発達を解きあかしたとすれば、ゴーリキーの文学作品による文学的な形象を通してのこの状況の描写こそは、まさにゴーリキーの文学の世界であったのであり、トルストイの文学は、かのレーニンのトルストイ評価「ロシア革命の鏡」論にみられるように、ゴーリキーの時代に先立つロシアの国民生活のすべてを、客観的に描きだした「〔巨大な〕一つのまつたき世界⁽²³⁾」であった。

このように、この小論の課題は、第一に、マカレンコがゴーリキーから学んだ点を明らかにするために、

ゴーリキーがトルストイに学んだ点、克服した点をも明確にすることにある。この課題は、単に、思想的なつながりを探究する意味をもつだけではない。ゴーリキー文学が、マカレンコにおいて文学と教育の一体化を可能とする作用をもちえたのは、先にもふれたように、実は、ゴーリキーによる社会主義リアリズムの確立、すなわち、批判的リアリズムの最高傑作といわれる「アンナ・カレーニナ」を生み出したトルストイ文学を乗越えたところにあるからである。

また第二に、トルストイは、世界的文豪であると同時に、ロシアにおける自由主義教育、児童中心主義教育の主要な提唱者の一人であった。そしてまた、トルストイの文学活動は、生涯、常になんらかの意味で教育的活動と結びついていた。その意味で、マカレンコの教育実践とゴーリキーの社会主義リアリズムの関連は、トルストイの批判的リアリズムと彼の教育思想、教育実践との関連と対比することができる。すなわち批判的リアリズムの教育上でのあらわれ、その思想上の性格と弱点とを明らかにすることである。

このように、以下では、ソビエト=ロシアの教育の歴史・教育思想の歴史をみる時に欠かすことの出来ない重要な視点の一つである文学と教育の関係を、トルストイ、ゴーリキー、マカレンコという一連のリアリズム文学の代表的な人物の系譜のなかで、真の人間形成、その為の教育という軸をすえて、把握しようとするものであり、また同時に、マカレンコ教育学の確立を、批判的リアリズムと教育、社会主義リアリズムの人間形成論、という、彼に先立つ二人の功績から、解きほぐし、その学ぶべき特質を明らかにしようとするものである。

つぎに、最初にふれるトルストイの教育思想の把握の問題に限っていえば、このような彼の文学との密接な関連のもとに、考察を進めていくことによってこそ彼の「芸術的作品を研究することにより……よりよく自分の敵を知り⁽²⁴⁾」そして、その教義を検討することによって、「解放の事業を最後までなしとげることを許さなかった……自身の弱さが、どこにあるかということを理解することができる⁽²⁵⁾」と考える。また、「自分の人生に深い信頼を失わずに今日までこられたのはトルストイのおかげである⁽²⁶⁾」という言葉に代表されるトルストイズムの影響力は、今なお、日本の思想のなかでは根強い、鶴見氏等により「日本の観念論」の代表とされた白樺派の思想は、今なお、主観的な善意から出発しているが故に、「無意識に人をだます結果⁽²⁷⁾」をもたらしていないとはいえない。教育権論の立場からする研究⁽²⁸⁾をはじめとする優れたトルストイの教育思想の諸研究に学びながら、「外側からの強い光の照射⁽²⁹⁾」に対し、トルストイの「内在的論理」をたどることによ

り、私達「自身の弱さ」を見出すことも必要だと考える。

注 (注が同じものは、文献が同じもの)

- (1) 斎藤喜博, 『私の教師論』(麦書房・1963)
- (2) 石井庄司, 「明治以前の文学教育」(講座『文学教育』2 牧書店・1959) p.9
- (3) 小川太郎, 「学校教育と文学教育」(岩波講座『文学の創造と鑑賞』5・1955) p5.~p.10
- (4) 蔵原惟人, 「文学の教育性はどこから来るか」(『新しい文学教室』新評論・1953) p.
- (5) 西郷竹彦, 『文学教育入門』(明治図書・1965) p.26~p.27
- (6) 山住正己, 「芸術教育」,(『教育科学入門』明治図書)
- (7) カイエロフ監修『ソビエトの教科書 教育学』,上,明治図書
- (8) 西尾実, 「文芸的国語教育の欠陥」,(講座児童文学大系6 三一書房・1955) p.34
- (9) 国分, 小田切編『文学のなかの教師』明治図書・1957
- (10) アーエス, マカレンコ, 「わたしの生活におけるマクシム・ゴーリキー」(『マカレンコ全集』II 明治図書)
- (11) 坂元忠芳, 「文学の教育的価値について」(「ソビエト教育科学」No.16 明治図書)
- (12) 国分一太郎, 「文学と教育」(岩波講座『文学』1・1953
(この序(一)の部分は、その骨子を、以前別のところでタイプ印刷したものによっているが本来「序」の性格をもつものなので、ここに本論の序として、かなりの部分を変更し、収録した)
- (13) ソビエト科学アカデミー『世界哲学史』, 3 (東京図書・1959) p.275
- (14) 注⑨を参照のこと
- (15) マクシム・ゴーリキー, 「原因について」(定本『ゴーリキー選集』3, 青木書店・1958)
- (16) “ 「フオマ・ゴルジエーフ」(定本「ゴーリキー選集」, 青木書店1959)
- (17) 坂元忠芳 (雑誌「ソビエト教育科学」No.27, 明治図書・1966)
- (18) 同上書 p.20
- (19) “ p.24
- (20) 注(10)を参照のこと
- (21) ゴーリキー, 『ロシア文学史』下, 岩波文庫・1958, p.206
- (22) これらの内容を示したものをあげておくと、①については、『幼年時代』、『マカール・チュー

ドラ』、『ダンコの伝説』、『鷹の歌』、『海燕の歌』等。②については、『コノヴァーロフ』、『チェルカッシュ』、『人々の中で』、『母』等。③については『人々の中で』、『三人』、『母』等。④については『幼年時代』、『人々の中で』、『小市民』、『太陽の子ら』等。⑤については、『鷹の歌』、『海燕の歌』、『敵』、『母』等があげられる。

- (23) レーニン「トルストイとプロレタリア闘争」他,(『レーニンの文学論』, 青木文庫・1954) p.24
- (24) ⑳に同じ p.297
- (25) ㉑ 注㉒に同じ p.51
- (27) 武者小路実篤『トルストイ』,(再建社・1959) p.1
- (28) 久野, 鶴見, 『現代日本の思想—その五つの渦』(岩波新書・1956) p.28
- (29) 海老原遥訳, 『ロシア国民教育論』(明治図書・1969) 解説(同氏には、同じ趣旨の研究が、ソビエト教育学会編『ソビエト教育学研究』, 明治図書・1961の中に「トルストイの国民教育論」がある。)
- (30) 同上書 p.226

I トルストイの文学と教育

—その批判リアリズムと教育思想—

(一) 初期トルストイ文学と方法

(1) 初期文学の概観

ゴーリキーは、トルストイの文学活動を総括的に、次のようにのべている。「トルストイの芸術的創造のすべては、ほとんどつぎの単一のテーマに帰するのである。すなわち公爵ネフリュードフのために、この世のいっさいの生活が調和であるに見えるような場所、またかれ自らが——世界でもっとも美しい、そしてもっとも偉大な人間であると自分に思えるようなそうした地上におけるよき場所をかれにみつけだしてやることである。」、すなわち、彼の活動は、「死滅せんとしつつある〔文化的〕貴族階級」の「一部のさいごの代表者」⁽¹⁾の努力であったのである。

このような努力を始めようとした時、トルストイの「生活探究」の出発点は、かの当時のロシア文学の主人公に顕著であった「オブローモフ主義」⁽²⁾の克服、すなわち「余計者」タイプの人間の克服にほかならなかつた。初期トルストイの文学活動、社会的な活動は、このような視点からまとめることができる。

この点について木村彰一氏は、「十九世紀のロシア文学にとってあれほど特徴的な『余計者』たちとトルストイの主人公たちとをわかつた本質的な相違」を、

「上流社会の虚偽の生活に対する痛烈な批判」と「若さや環境からくる未熟さと偏見と虚栄と傲慢とをしいに克服しつつ、人生の意味の探究⁽³⁾」という点にもとめ、そのような姿勢が、「戦争と平和」のピエール、「コサック」のオレーニン、「アンナ・カレーニナ」のレーヴイン、「復活」のネフリュードフ等にみられると述べている。「本質的な相違」か、どうかについては、後に検討するとして、トルストイの初期作品の主人公の特質がうまくとらえられている。

いずれにしても、トルストイは、帝政ロシアという状況の中で、それが生み出した行きどころのない、そしてかつ、現実には、なんの役にも立たない文化的貴族の居場所を追究しなければならなかった。

このようにして、彼の初期の文学的活動は、第一に「自分自身の道徳的な発展の過程を精細にあとづけつつ、自己の人格形成に影響を——特にわるい影響を与えた現象を批判的に分析」しようとしたのであり「ゆたかな知性と感受性にめぐまれた自分が、なぜ『迷いにおち』なければならなかったか、自分の魂のすこやかな発展をさまたげた要因は何であったかを追求」することになった。第二に、「都市貴族の生活の頹廢や無気力やモラルの低さ⁽⁵⁾」、「人間社会のあらゆる虚偽の摘発⁽⁶⁾」であり、第三に、一方では、自分の精神的危機を乗り越える為の努力と失敗、それに対比される「民衆のたくましい生活力や高い道徳性⁽⁷⁾」の探究にあった。こうした初期トルストイの課題意識は、その前半生期間の体験の集録である「アンナ・カレーニナ」の執筆後に、いわゆる精神的「危機」に直面した⁽⁸⁾。そして、しばらく筆を断った後、「芸術家トルストイ」に対し、「説教者トルストイ」が優位する時期がはじまる。したがって「アンナ・カレーニナ」以後の作品は彼の新しい「宗教的教義」なるものが、比重をしめるようになる。ここでは、それまでに至る期間を対照とする。

(2) 批判的リアリズム——文学のテーマと方法——

(1)で述べた、彼の課題意識は、歴史的には、「余計者」の克服をめざしながら、彼自身にとっては自己形成的性格を色濃くもちながら展開されていく。初期の主な作品を分類してみると、自伝的な性格をもった「幼年時代」、「少年時代」、「青年時代」の三部作「田舎の生活の中に幸福と正義の理想の実現を探究⁽¹¹⁾」しようとした、これも自伝的な性格をもった「地主の朝」これにつらねる「コサック」、さらに、西欧旅行の際の見聞に基づき、西欧の「平等」なるものを批判した「リュツェルン」、そして、「隊内の士気を保持するという目的⁽¹²⁾」をもった。一連の軍事物、そして、以上⁽¹³⁾の諸作品の集積ともいべき「無数のあらゆる現象」を描き出した「戦争と平和」、一人の誠実で情熱的な

女性アンナの悲劇を描いた当時の現代小説「アンナ・カレーニナ」等である。

以上の各作品群での主題と手法は、次のようにみることが出来る。

第一に、彼が、ロシアの文壇に名をはせるきっかけとなった「幼年時代」は、チエルヌイシエフスキーが「魂の弁証法」をみぬく鋭い洞察力を高く評価したように、児童の心理への深い理解を示している。トルストイのこの手法は、彼自身が当時の日記の中に書いているように、「新しい傾向では、感情の細部の面白さが、事件そのものの面白さにとって代っている」という文学認識に支えられ、「作品が人を惹きつけるためには、一つの思想が、作品を導いて行くだけでは足りぬ。作品全部がまた一つの感情で貫かれていることが必要⁽¹⁴⁾」だとし、こうして「幼年時代」は、「子供の目を書くこと⁽¹⁵⁾」という方法がとられ、幼児の心理のひめられたプロセスをいきいきと描き出すことに成功している。この手法が、後のトルストイの作品の重要な部分となったのはいうまでもない。彼のリアリズムは、その作品の筋よりも、周囲の人間や自然によって引き起される主人公達の「感情」の細部の分析、そして、それを通しての道徳上の問題の追究にあるのである。この「魂の弁証法」の分析方法は、まさに歴史的には、自分達の経済的な社会的な位置の平正さを自覚しはじめ精神的更新を志していた人々の「最も優秀な少数」の人々の内面生活を描出する手段としてトルストイによって創り出された重要な手法であったといえよう。

さて、第二の作品群に移ろう。自伝的作品三部作の続編的生活をもつ。「地主の朝」等は、当時のトルストイの世界観をよくあらわしている。「地主の朝」の執筆について、彼は、その根本思想を次のように書いている。「『ロシア地主物語』の根本思想。主人公は田舎の生活の中に幸福と正義の理想の実現を探究しようとする。」「長編の主要な思想は——わが時代の教養ある地主の正しい生活と農奴制は絶対併立せずということではなければならぬ。農奴制の貧しさのすべてが表現され、矯正の手段がさし示されなければならぬ⁽¹⁶⁾」

こうして、この作品は、農民の困苦、欠乏と、その中に入り、彼等に、新生活を導き出してやろうという主人公の切実な意図、試みとが描かれ、同時に、彼に対する農民の不信、失敗とが、まざまざと描写されている。このような失意の主人公に対して、新しい世界の存在を示したのが初期の佳作といわれる「コサック」である。この作品は、風俗誌的、英雄叙事誌の様式をもちながら、ロシアの民衆（ことにコーカサスの）のたくましい生活力や高い道徳性が、都市貴族の生活や無気力やモラルの低さと対比させつつ描かれている。オレーニンは、「これから帰っていかうとしている世

界にあるものは、なにもかもインチキだ」と知りながら村を去っていく。

前者の作品は、農奴制という遅れたロシアに対する優れた貴族の反省と批判に貫かれ、だが一方、それに徹底的に対決することができない思想（トルストイ自身の思想といってよいかもしい。）それに対する農民の不信感が描かれている。こうしてこの作品は、批判的に当時の社会問題を取り扱う特質をもっていた。

また後者では、コーカサスの自然の描写と農民の典型エローシャの創出が特徴的である。エローシャは、コサック村の豊かな伝統の体現者であり、部落のあらゆる人間と職業、森に住むあらゆる動物とその習性に精通しているきわめて人間的な賢者なのである。彼は時折、「人間て、ばかだよ」とつぶやきながら、人間は人間や動物を殺したりしなければ生きていくことができないという現実を、あるがままの姿でうけいれるそのような人間なのである。トルストイは、このエローシャに、自分の属している社会と密接に結びつき、とけこんでいる人間を見出した。このエローシャの形象は、自然と社会の中にとけ込み真の生活をしているたくましい生活力をもった民衆の典型として、トルストイ思想の一つの重要な要素となった。

第三に、「リュツェルン」について述べなければならない。トルストイは、1857年に外国旅行をし、フランス、スウェーデン、イタリア、ドイツをまわった。この外国旅行は、彼のそれまでの文明と進歩に対する信仰を崩壊させ、そのような意識の昇華が、この「リュツェルン」といわれている。彼は、この作品は、いわゆる「平等」なるものを実現したブルジョワ的西欧文明を否定せずにはいられない心情をトルストイがもつにいたったことを示している。

また、「セヴァストーポリ」三部作を始めとする軍記物は、「地主の朝」の実践の挫折後の自暴自棄的な生活の立て直しの為の軍隊生活の経験からきている。これらの作品の執筆の動機は、彼が雑誌の発刊を企図した「士気を保持する」ということにあったとはいえ後に、非戦論に転化していく重要な経験の戦争の無意味な殺戮、人生の意義に関する考察を伴っている。

第四に、主要な作品の成果を受継ぎ、「ロシアの健康な社会への復帰の道⁽¹⁷⁾」を、ナポレオンを打破った偉大な歴史的な事件のなかを探ろうとしたのが、「戦争と平和」である。当初、デカブリストの物語を書くつもりでの資料収集が、この祖国戦争へと発展した。

彼は、この勝利を「人類の運命をあえて決しようとする傲岸な個性である」ナポレオンに対する「神の目的に対する従順な服従⁽¹⁸⁾」の体現者、ロシアの兵士達の勝利としたのである。こうして、この長編は、「永遠⁽¹⁹⁾

に運動し、発展する生活は絶滅されない……真の生活⁽²⁰⁾は、善、真実、素朴（自然状態）の理性に従うもの」であるという彼の思想を示した。このような思想は、かの「コサック」のエローシャを思い起させるカラターエフの形象に、その一つの典型がみられる。彼こそは、ロシア精神の体現者、ロシアの農民精神の具現者なのであり、愛と犠牲に生き、自然的欲求以外のあらゆる奢侈的欲求や幸福を捨てて、不幸を神の意志として甘受する男なのである。こうして、この作品は、彼がそれまでに得た思想を、ロシアの歴史を描くことによって示したのである。

この大作を書き終ると、トルストイは、当時の現代小説「アンナ・カレニナ」を書き始める。この作品では、当時の貴族社会の道徳と相入れない女性アンナの悲劇が描かれているが、そこに月並みで乱脈なオブロンスキーと対比して登場するレーヴインを通して、トルストイ自身が描かれている。レーヴインは、トーマス・マンが「アンナ・カレニナ」論の中で、「ルソー主義者⁽²¹⁾」であると評したように、田園生活のみを人間的な生活とした。そして、その生活は、現実の真剣な、肉体労働をともなうものでなければならず、人間を自然のなかにつつま生活でなければならぬと考えているのである。こうした思想は、トルストイの「回心」前の「前半生期間の体験の集録⁽²²⁾」といえるものであり、トルストイの行きついた場所であった。このような思想を軸として、この作品でトルストイは、批判的リアリズムの代表的作品⁽²³⁾を完成させた。

(3) 「余計者」の克服と限界—社会思想と教育—

(1)、(2)においては、トルストイの自己形成史をからませながら、それと切り離すことのできない文学作品を中心に、そのテーマと手法をみてきたが、ここではその社会思想的な性格を明らかにしておかねばならない。

岡沢秀虎氏は『トルストイ研究』のなかで、60年代のトルストイの文学観が、明らかに、「彼の所謂『貴重なる三人組』（ドルジーニン、アンネコフ、ポートキン）の見解に近いものである⁽²⁴⁾」と述べている。確かに、この時期のトルストイにとっては、この三人組は貴重であった。彼が「青年時代」を発表する前に批判を求めたのはドルジーニンであったし、「アンナ・カレニナ」を最初に通読したのは、ポートキンであった。だから、彼は、この三人の芸術的鑑賞眼に絶大な信頼をおいていたと考えてよい。

このように、トルストイが革命的民主主義者を遠ざけながら信頼した貴重なる三人組とは何か。ペ・イ・ブルーソフは、ドルジーニン達の「余計者」タイプの克服論について、チエルヌイシエフスキーのそれと対比させながら、それが自由主義的克服論であるとしな

から次のように述べている。

ドルジニンは、ルージン型の人間について、その欠点を、「事業と言葉の分離」にあるとし、「高潔な熱狂だけでは何事もなすことは出来ない。雄弁な言葉だけでは大したことは出来ない。教育のある生活の活動家は、運命によってその中に生きるべく定められたところの環境のすべての手段を親しく知ることが必要である。⁽²⁵⁾」と主張する。すなわち、彼のいう言葉から実行への移行とは、「彼を取りかこむ環境との可能な必要な調和」⁽²⁶⁾なのである。

このドルジニンのみにみるように、彼等貴重なる三人組の「余計者」に対する見解は一致したものであり、「余計者」が、環境と調和したがることを批判し周囲の環境と妥協することを主張したのである。その具体的な方策として彼等は、「労働に従事すること」を呼びかけたが、それは、「労働とは、敏腕な官吏、てきぱきと事を運ぶ地主たることを意味する。諸君が暖かく、また落着いていられるように自分の仕事を運ぶことを意味する。但し自分の仕事を運ぶ際にあらゆるきちんとした礼儀正しい人間が守っている条件を破らないこと」⁽²⁷⁾という内容であった。

こうした自由主義者達の克服論とトルストイ思想との関係は、「地主の朝」、「コサック」、「アンナ・カレーニナ」の中に、彼等の主張を实践しようとしたトルストイを写しみるができることによって明らかであろう。だがトルストイは、彼自身、その実践を熱心に行うことに加え、「その中に生きるべく定められたところの環境」との調和を果している人間像を追い求めることもしたのである。それが、「コサック」のエローシャであり、「戦争と平和」のカラターエフなのであった。彼と単なる自由主義者と区別する点は、ここにこそある。彼は、コーカサスの自然と、その中で生活する農民の中に、「状況との調和」の典型を見出し、ロシアの農民の生活の中に、その姿を見たのである。彼の思想の健全さの最大の保障は、レーニンが指摘しているように、ここにある。だが、すでに、チエルヌイシエフスキーをはじめとする革命的民主主義者達は、「余計者」に対して、現実の客観的発展法則を理解し、これに基いて革命的な目的をもって現実に関与する方向を呼びかけていた。だが、トルストイは、彼等の指し示す方向のなかに自分の理想像を見出すことができなかつたし、また、農村的家父長制とともに、没落しつつある貴族階級出身の彼は、身分の生活範囲、体験の範囲のなかで、農民以外の健全な生活も、それに向かう芽すらも見出せなかつたのである。⁽²⁸⁾

だが、このような「善き生活の探究」への努力のなかで、彼は、それへ向う切実さ、情熱の激しさゆえに彼の知るあらゆる場面での人間形成を追究し、形成を

そこなうものへの批判を行い、善き生活の範型となるものを、農民の中に、英雄的叙事誌の中に、風物誌の中に、そして祖国の歴史や英雄の中に探し求めたのである。こうして、文学方法の上では、その時代が生み出しうる最大の手法、批判的リアリズムの方法を完成した。そして状況・環境への一致・調和というその思想は、農民に対する最大の理解と、同情、そして尊敬を可能とし、その立場に立った農業経営の指導、教育の実践を行なうにいたらしめた。

このような立場にたった彼の教育実践とその思想は後述するように、以上にのべたようにな彼の思想を当然のことながら、見事に反映している。

トルストイは、当時の学校における子どもの状態を「魂の学校的状態」とよび、批判するとともに、子どもの自主性、自発性を尊重し、教育学、教育科学の基準を「自由」にあると述べた。

また、「真剣な教育は、専ら実生活」からきているのであり、教育は、実は、広い範囲の子どもをめぐる様々のものから成立しており、学校は、国民が生活している「基本法則」を意識しなければならないのであり、教育科学も実は、そのような認識が必要なのである。そして、教育の内容は、生活が人間に対して提起してくる様々の問題に解答を与えるものである。そして、その中心は、彼にあっては、3 R's と宗教的な心情にある。そして、そのなかでも彼が重視したのは「人間のあらゆる方面の思想が、簡潔な形式で結合した書」である聖書である。また、教師と生徒との理想的な関係は、「二つの要望の合致」にこそある。

こうした内容をもって展開される教育実践とその思想は、農民の自然な生活を破壊せず、彼等の要求に答え、その生活の向上のための助力として考えられている。

だが、その「自由」な教育の主張と、真の人間形成の為の考察は、様々な学ぶべき側面をもって展開されていくのである。次には、彼のこの教育思想の論理とそれが生み出したものを、あきらかにしたい。(未完)

注

- (1) 以上のゴリキーからの引用は、序の注(2)に同じ p.294～p.295
- (2) プーシュキン「エヴゲーニイ・オネーギン」の主人公オネーギンの形象から始まるといわれるロシア19世紀文学に顕著なタイプ、19世紀のロシア社会の現実の中で、社会のために役立てうる十分の能力を持ちながら、その適用の場を見出しえぬままつまらない生活に、無為の生活に時をすくすくを余儀なくされた貴族・知識人のこと。レーンモントフの「現代の英雄」、ツルゲーネフの「ルー

- ジン」, 「貴族の楽」, ゴンチャールロフの「オブローモフ」等の主人公に受け継がれていく。
- (3) 木村彰一, 『トルストイ, IV』, (世界文学大系・84, 筑摩書房・1964) 解説p.435
- (4), (5), (6), (7) 同上書 p.429, p.433, p.436, p.433
- (8)~(10) 蔵原惟人, 「トルストイ」, (『ロシア文学手帖』創元社・1955) p.90~91
- (11) トルストイ, 『トルストイ全集・18』(日記, 書簡), (河出書房新社・1967) p.39
- (12) 同上書 p.322
- (13) ソビエト科学アカデミー「世界哲学史」7, (東京図書・1961) p.50
- (14), (15), トルストイ日記, 書簡, 前掲 p.53~45
- (16) " p.64, p.39
- (17)~(19) 北垣信行, 『ロシアの文学』(世界の文学史8 明治書院・1966) p.169~170
- (20) 前掲 『世界哲学史』p.57
- (21) トーマス・マン『アンナ・カレーニナ論』(前掲筑摩書房版 トルストイ I) p.589
- (22) 網野蘭 同上書 解説 p.595
- (23) この評価は, 今までふれたうちでは, たとえば蔵原, 網野論文など。
- (24) 岡沢 秀虎『トルストイ 研究』(理想社1・963) p.81
- (25), (26), ペ・イ・ブルーソフ『ロシア・リアリズムの系譜』(小沢訣・未来社・1955) p.265~266
- (27), (28), 同上書 p.215, p.266
- (29) 序の注, (22)参照のこと。
- (30) 同上書並びに, レーニン・プレハーノフ他「マルクス主義の鏡に映じたるトルストイ」(希望閣・1931) 参照のこと。そこでは, 農民経済と農民生活の崩壊と資本主義の発展という条件の中でのトルストイの活動の意義, 限界が位置づけられている。